

# 小樽高商初代校長 渡辺龍聖続伝

倉 田 稔

## 目 次

はじめに

- 1 小樽高等商業学校の校長になるまで
- 2 日本の学校
- 3 雑
- 4 渡辺の海外出張

## はじめに

小樽高等商業学校（略称、小樽高商）の初代校長渡辺（正しくは、渡邊）龍聖の伝記を、次の3つですでに書いた。

- 1 小樽高商史研究会〔編〕『小樽高商の人々』北海道大学図書刊行会 2002年
- 2 「小樽高等商業学校と渡辺龍聖」（小樽商科大学『商学討究』44巻4号，1994年3月）
- 3 「小樽高商の第1期」（同上，46巻1号，1995年7月），特にその第1節「渡辺校長の考え方」である。ちなみに，小樽高商の第1期というのは，渡辺校長の時代を意味する。

本稿は，これら3点でもれた諸点だけを記す。ただし主に小樽時代までである。

## 1 小樽高等商業学校の校長になるまで

渡辺龍聖、後の小樽高商校長が、アメリカ留学から帰るころの日本の大事件は、日清戦争（1894年）であった。日本人はこれをきっかけにして、従来立派な国だと思っていた中国を蔑視し始めたし、軍国主義的になっていった。その上、日本は、この日清戦争をきっかけにして、台湾を占領し、帝国主義的になっていった。明治政府の富国強兵政策の結果であった。そして日本では産業革命がこのころ成立したとされる。

渡辺は、帰国して明治28（1895）年春、高等師範学校講師となった。『任免』の明治二八年九月二十日で、文部大臣侯爵西園寺公望は、内閣書記官長伊東巳代治にあてて、「渡辺龍聖 右高等師範学校附属音楽学校教授（教育学受持ち）兼高等師範学校教授（英語科受持）ニ任用之儀上奏致度ニ付至急詮衡相成度……」と出した。

彼は、明治32（1899）年4月、東京音楽学校校長心得となり、『明治三十二年 任免 二十』によれば、「明治三二年七月」に、文部大臣は首相侯爵山県有朋に奏している、「高等師範学校教授兼東京音楽学校教授従六位 渡辺龍聖 兼任東京音楽学校校長」とある。

渡辺は、音楽学校長時代、有名な作曲家・瀧廉太郎<sup>1)</sup>と関わりがあった。「荒城の月」「箱根の山」その他で、今なお知られる瀧は、明治12（1879）年、東京に生まれた。父は、大分県岡崎趾のある竹田郡長であった。瀧は、明治27（1894）年、高師附属音楽学校予科に入学したが、正規の入学に必要な科目に合格していなかった。同校の本科にあたる科は専修科で、三年制であった。小山作之助が瀧の後援者で、正規の修学ができるよう願っていたが、その実現は容易ではなかった。

渡辺は、瀧の抜群の才能を見抜いたものの、何分にも瀧が病弱であったので、

---

1) 瀧は、明治12（1879）年、東京に生まれ。高師附属音楽学校専修部を、明治31（1898）年に卒業した。その時、校長が渡辺であった。

陰に陽に強力な措置で教授会の了解を得て、瀧を本入学させた。瀧は、明治31（1898）年に専修部を卒業した。その後2年間、研究生として小学唱歌講習科の授業を嘱託された。明治32（1899）年11月、洋琴はピアノと改称された<sup>2)</sup>。この若くして逝った天才瀧廉太郎が上野の音楽学校を卒業したときの校長が、実に哲学者渡辺であったのだ。渡辺は、廉太郎の天分をちゃんと知り抜き、卒業後も講師として学校に留め、よく近づけていた。

ある日曜、渡辺を訪ねてきたこの青年に、「瀧君！ ときには浅草見物にいいものだよ。」そう言い、散歩につれ出した。その当時の浅草には、“十二か月”という屋号のしるこ屋があり、味も甘いが、「十二か月（十二はい）をおあがりのかたわらは代金を申し受けず、粗品を呈上します」という大きな看板をにかけており、いつも大ぜいの客がつかけていた。

渡辺は、瀧青年を促し、のれんをくぐった。[瀧] 廉太郎はそう強い身体ではなく、二・三ばいで満腹したのに、渡辺校長は何ばいも平らげ、ついに十一杯目を空にした。あまりの見事さに店いっぱいにつめかけていた客たちが、ことごとくこの二人の師弟に視線をそそぐので、[瀧] 廉太郎ははずかしさを覚え顔をあからめ、「先生！ 大丈夫ですか」と、不安気にささやくと、「男はな、時には腹が、額の堅さになるぐらい食はなきゃいかんよ」と、女中のもってきた十二杯目をべろっと胃袋の中に流しこんだ。

ドンドンドンと太鼓がうちならされた。十二か月を平らげた祝いの合図である。店中の客が大きく拍手し、爆笑した。しるこ屋の主人が羽織袴で渡辺の前にやってきて、ていねいにお辞儀をし、

「まことに有難いことでございます。失礼ですがお名前とご職業をおきかせ願えますまいか」と申し出た。

「わしかえ、渡辺龍聖という者で、上野の音楽学校の校長をしている」

「は、先生さまでいらっしゃいますか、景品は文具るいと化粧品るいと二種いたしておりますが、いずれにいたませうか」

---

2) 小河成美「初代校長 渡辺龍聖先生と瀧廉太郎」（『緑丘』77号）。

「ただで十二はいも食べ、その上景品までもらうのは気がひける、景品はいらない」

「いいえ、ちゃんと看板にも記していることですし、どうか、どちらでもおっしゃっていただきます」

「たってそんなに申されるなあ、お店おしるこはたしかにうまい。相すまぬがもう一ぱいもらいたいが——」

客の全部が又大きく拍手した。そして皆がみつめている前で、見事十三はい目を片付け、

「滝君、もう帰ろう、腹がくちくなくなった」

教え子の食べた幾はい分かの代金を支払い、二人はのれんの外に出た<sup>3)</sup>。

当時、文部省の海外留学生は3名で、明治34（1901）年目は、夏目・石と東京帝大・芳賀矢一<sup>4)</sup>博士が内定していた。夏目漱石はこの時、熊本五高教授で、帰朝後、東京帝大文科教授に赴任することになっていた。残る一名は東京音楽学校から推薦する予定であったので、渡辺は、瀧が病弱ゆえ延期することができないとして、先輩候補者を説得して了解を得、彼を文部省に推薦した。明治33（1900）年6月、留学が実現した。瀧は、22才でドイツ・ライプチヒ・メンデルスゾーン音楽院に作曲研究のために、留学が決定し、3名そろって6月、杜途についた。当時の渡航ルートは、貨客両用の日本船で、マルセーユ到着まで約1カ月半を要した。相携えて、パリ万国博を見物後、それぞれ留学地に分かれていった。その後、瀧はドイツで発病し、肺結核のため咯血し、2カ月後に帰国のやむなきにいたった。帰路は若狭丸に乗った。ロンドンで土井晩翠<sup>5)</sup>に逢い、「荒城の月」の作曲を依頼された。瀧は、明治36（1903）年6月28日、24才で、志半ばで亡くなった。「花」は留学の1年前、「お正月」は留学前、「鳩ポッポ」は留学送別会での発表、「箱根の山」は明治34（1901）年1月3日、

3) 鎌倉啓三、「初代校長 渡辺龍聖」, 同 70。今村均の自叙伝から。

4) はが やいち, 1867-1927, 国文学者。1902年, 東大教授, 03年, 文学博士。

5) つちい(後に どい) ばんすい, 1871-1952, 詩人, 英文学者。二高教授。

に作曲された。軍歌や長唄が一般的な時代に、瀧の口語歌詞の作曲は画期的であった<sup>6)</sup>。

明治35（1902）年に、外務大臣・小村寿太郎<sup>7)</sup>は、東京高等師範学校校長・嘉納治五郎に、清国教育の近代化に尽力する方途を模索させていた。嘉納は、渡辺を選んだ。師範学校教授の席はそのままで、渡辺は北京へ渡った。

公文書館蔵の『明治三五年 任免 卷十一』によれば、「東京音楽学校校長渡辺龍聖清国被差遣ノ件 右謹テ奏ス 明治三五年四月十九日 内閣総理大臣伯爵桂太郎」とある。つづいて「東京音楽学校長 渡辺龍聖 右は学事視察の為清国へ派遣命セラレ……」と「文部大臣理学博士男爵 菊池大麓」の署名があり、首相桂あてにこうかく、「追テ本件ハ外務省ノ囑託ニ依リ出張候義ニ付旅費ハ同省ヨリ支弁ノ筈ニ有之候 此段申添候也」<sup>8)</sup>。

直隸総督になった袁世凱は、各方面にわたり近代化案をたて、外国、特に日本から顧問を多数招いて、実施した。

渡辺龍聖は、1902年春、文部省の内命を受けて、華北の教育事情を視察中、袁世凱と会談し、その際、顧問就任を要請された。彼は一時帰国し、翻訳官3名、教員9名とともに中国へ渡った。在中の教員2名も加わった<sup>9)</sup>。

渡辺は、7年間その職にあり、同42（1909）年12月までその職にあって、同年帰国した。ちょうど袁が解任されたところである。その間、明治 37（1904）年に日露戦争が行なわれた。緒戦の勝利で日本中では提灯行列が続き、人々は好戦的となった。国債が応募させられ、物価はあがり、消費の緊縮政策がとら

6) 小河，同。

7) こむら じゅたろう 1855-1911。判事だったが、1893年、清国公使館（北京）に赴任、1896年、外務次官 1901-06年、桂内閣の外相、1902年、日英同盟を結ぶ。1904年、日露開戦の外交を指導。1905年、講和全権委員としてポーツマス条約に調印。

8) この文書は、荻野先生に教わる。以下同様。

9) 阿部洋「清末直隸省の教育改革と渡辺龍聖」（『国立教育研究所紀要』第115集 昭和63年3月）。

れた。明治38（1905）年に日本は日露戦争に勝ったとされるが、正確には休戦である。またロシアが負けたと見えた原因は、ロシア国内の第1次ブルジョア革命のせいであった。革命が国内で起きてしまえば、ロシア政府は戦争を続けられなかったのである。日露戦争の頃には日本では重工業が伸びていた。三井は明治40（1907）年、室蘭に日本製鋼所を設立した。日露戦争によって日本は、南樺太をロシアから割譲し、朝鮮の支配権をロシアから奪った。この日清・日露の戦いで、日本は世界の強国の仲間に入った。

渡辺を小樽高商校長に決めた岡田良平は、一高教授から文部省に入り、1907年、京大総長から、第2次桂内閣の小松原文相のもとで次官をつとめていた。

渡辺は青森から青函連絡船に乗り、函館から汽車に乗って、はるばる小樽へやってきた。青函連絡船は、明治41（1908）年に、小樽・函館間鉄道はすでに明治37（1904）年に開通していた。

## 2 日本の学校

明治政府は、富国強兵政策をとった。欧米に負けてはならないからであった。富国のためには殖産興業と並んで、教育の近代化に努めた。政府はまず小学校教育に力を入れた。1886（明治19）年には就学の義務制を發布した。それまで3割の就学率だった日本は、5割へと向上するきっかけになった。

政府はまた、帝国大学を作った。そして高等学校（旧制）や高等商業学校を作るようになった。帝国大学は、官僚を作り、法律を教える必要があった。その基礎として高等学校を作ったのである。

高等教育で北海道では、1876（明治9）年に、札幌農学校が開校した。東京にあった学校が札幌に明治8年に移ってきた。ここにクラーク博士をアメリカから初代教頭として呼び、彼は教頭ではいやであったが、実権を与えられ、9カ月滞在し、この学校に影響を与えた。

1877（明治10）年に、東京大学が設立され、1886（明治19）年に、帝国大学

となった。初め国立の高等教育機関は、理工系が多く、また医科学校が立てられた。帝国大学がその後ゆっくりと作られるのだが、ここでは高級官僚の卵を育てるのであった。続いて高等学校が建てられた。1886（明治19）年に第1高等学校が東京に、三高が京都に、1887（明治20）年に、二高が仙台に、四高が金沢に、五高が熊本にと、矢継ぎ早であった。

1887（明治20）年に高等商業学校が開校した。1902（明治35）年には東京高等商業学校と改称された。

1897（明治30）年には、京都帝国大学が設立され、同時に帝国大学は東京帝大になった。1908（明治41）年に、東京帝国大学法科大学に経済学科を設置し、これは1919（大正8）年に経済学部を新設した。1907（明治40）年 東北帝国大学が、既設の札幌農学校を農科大学とし、東北帝国大学農科大学となった。その後しばし仙台には大学がなかった。1911（明治44）年 仙台に理科大学が開設された。1910（明治43）年に、九州帝国大学が作られた。

政府は、高等商業学校を作ることとした。1904（明治37）年に大阪市立高商が認可された。これは公立であった。1902（明治35）年に、神戸高商を、1905（明治38）年に、山口高等学校を改組して、山口高商と改称し、長崎高商も作った。次に国立の第5高商が東日本に作られることになった。

この時代、明治41年7月14日から44年8月30日まで、文相は松原英太郎であった。

一方、私学はいじめられていた。1890（明治23）年に慶応義塾が大学部を設置したが、1904（明治37）年に専門学校として認可された。早稲田も、1882（明治15）年に東京専門学校として出発し、1902（明治35）年に早稲田大学と改称したが、1904（明治37）年に専門学校として認可された。

しかし政府は、北海道には高等学校は作らなかった。その代わり、明治9（1876）年に札幌農業学校を作った。これは、明治40（1907）年に東北帝国大学農科大学になり、その後、北海道帝国大学になってゆくのであった。そして札幌に予科もできた。一方、政府は、富国のために国民に高度な商業を学んでもらう必要があった。そのため、高等商業学校が作られねばならなかった。高

等商業という学校は、日本の資本主義経済の発展のための必要から全国的に設立された施設である。資本主義体制下の企業の経営上必要な事務的技術を身につけた者を養成するためのものであった。

明治35（1902）年に、東京の高等商業学校が東京高等商業学校と改称された。同年、神戸高等商業学校が設立され、明治37（1904）年に、大阪市立高等商業学校が高商に昇格し、明治38（1905）年には、山口高等商業学校および長崎高等商業学校が設立された。大阪のそれは国立ではないので、次に設立される国立の高等商業学校は、いわゆる第五高等商業学校とされた。日露戦争（1904-05）後、政府は、国際貿易振興上、高商をさらにもう一校新設する構想を持った。これを察知して、全国の有力都市が誘致運動を激しく始めた。それに、これら既存の4つの国立高商は東京より西にあったので、東京より東に作ることとされた。

日本経済の発達に伴い、明治以来、小樽も発展していた。明治34（1901）年には、小樽港が開港し、小樽に区制がしかれていた。小樽区会は、政府へ高等商業学校を設置したいという希望を述べた。こうして小樽高等商業学校が創立され、北海道では、札幌農学校に次ぐ古い高等教育機関となった。小樽高商は、北海道でただひとつの文科系官立専門学校であった。地元の北海道出身者が三分の一くらいで、あとは全国各地からの学生で占められた。このころ、東大にも京大にも経済学部がなく、それらができたのは大正8年であったし、他の国立学校にも経済学部・商学部はなかった<sup>10)</sup>。

### 3 雑

小樽高商が設置された明治43年には大逆事件が起き、開校した翌44年には大逆事件の関係者に判決が出た。多くは死刑であった。ここから日本は冬の時代を迎える。小樽高商が認可され、開校されたのは、丁度この年々であった。社

---

10) 断わりないかぎり 年号は設置年である。



会運動は逼塞させられた。

1918（大正7）年 北海道帝国大開設により（札幌の）農科大学を分離。北海道帝国大農科大学となった。札幌農学校の予科を併合し、帝国大学のなかで唯一予科をもった。

高商の外人講師の1人、ドクター・フランクの師は、後にノーベル賞を授賞するネルンストであって、フランクの博士論文の題名は「Pyrrolidin 誘導体について」であった。1912年に英国人アミー・ルーシー・フィッシャーと結婚した。彼女も東洋に関心があった。日本のお雇い外国人のうち、ドイツ人は37%であり、一番多いのである。

彼の給料は実際は450円であった。多分渡辺よりも高いだろう。当時一流のサラリーマンが100円である。「小樽高等商業学校長渡辺龍聖とルイ・ヒューゴー・フランクとの間に於て」締結した契約によれば、「第二條……本国より日本小樽に至る間の旅費として金975円を受領」する。「第三條……俸給として毎月末に1カ月金400円及び手当50円」とある（原文はカタカナ）。

フランクは、初め緑町の官舎に住んだ。

彼はドイツ語母国人であるが、日本人学生のことを考えて、英語で授業をした。彼はドイツ語なまりの英語を話した。しかし皮肉にも、逆に学生には分かりはよかった。初めは生徒は、英語がチンプン・カンブンであったが、段々慣れてきた。その上、試験は英語で出され、英語で答えねばならなかった。答案を英語で書くので、学生は和英辞典は持込み可だった。このような1年間で、生徒は英語ができるようになった。

1909（明治42）年 東京高商で大学昇格運動おきた。1920（大正9）年に東京商科大学となった。その後、神戸高商が神戸商大になった。そういう情勢なので、小樽でも昇格運動が起きたのである。

#### 4 渡辺の海外出張

1920（大正9）年8月、渡辺は欧米各国へ出張を命ぜられ、1921（大正10）年4月に帰国し、以前ほとんど書き上げていた論文を完成させ、8月、文学博士の学位を受けた。どこの大学かは分からない。

『大正九年 任免 八月 二卷二十九』によれば、「小樽高等商業学校校長 渡辺龍聖 第二高等学校長 武藤虎太 右教育視察の為欧米各国へ出張を命じたいから御認可を願ひます。大正九年八月十日 文部大臣 中橋徳太郎 内閣総理大臣原敬殿 追て本文出張費は本年度海外教育視察費から支出し 期間は約七箇月の予定です。」とある。

つづいて「正四位勲三等渡辺龍聖小樽高等商業学校名誉教授の名称を授くるの件 右謹て奏す 大正十年十二月十日 内閣総理大臣子爵 高橋是清」（原文カタカナをひらがなにした）。

この間、エピソードがある。今村均の自伝である。

1920（大正9）年、第1次大戦の終わった翌年<sup>11)</sup>、講和会議がフランスのヴェルサイユで行はれている最中、在英大使館附武官の補佐官をつとめていた私（＝今村）のところに、一人の同胞がたづねてきた。名刺をみると「小樽高等商業学校校長渡辺龍聖」たる。早速お会いしたところ、私の親戚のある教育家からの紹介状をさし出された。“渡辺君は自分の最も信頼している親友、ちっともへんぶくを飾らないえらい哲学者だ”と書いてある。

「英国には2週間ほど滞在上、フランスに渡ろうと思っています。ロンドン市内の中学校の一つを参観したいと思い、大使館に交渉方をお願いしましたが、平和会議の仕事で目をまわしており、とてもお世話してあげる余裕がないと断られてしまいました。どこかお知り合いの学校はありませんか」

「私は大使館に附属していますが、軍部だけに交渉をもち、他の方面には知合いはわずかですが、ここの参謀本部の日本班に 戦前 数年間日本にも留学し

11) 第1次大戦が終わったのは1918（大正7）年で、その翌年といっても1919（大正8）年となるので、この叙述は変だが、そのままとする。

ていたヒル少佐というひとがいます。ごく親かな武官ですから 相談してみましよう」。

すぐその場で電話し、渡辺博士の学校見学の世話を頼んだところ 引受けてくれ、翌日の午前十時 有名なセントポール中学校の見学を手配してくれた。博士が学校参観を行った日の夕食は、私が日本人クラブにお招きすることにしてあり、午後5時すぎに行ってみると 博士はもう来ておった。

「おかげで今日は親切に取扱はれ、校長自身が玄関に出迎え “遠慮なく何でも見て下さい とくに希望の学科があれば それに多くの時間をあてましょう” と云うのです “それでは修身を教えている教室を拝見したい” と申しますと “修身というのは倫理学とか哲学を意味するのですか” と たずねますので “いいえ、生徒の徳性修養についての教育です” と云いますと、 “それなら残念ですが 英国ではどの学校でも修身という課目を設けては教育致しておりません、生徒の個性教養は家庭と教会で行い、学校では全教師が——化学の先生でも 図画の先生でも——すべての機会をとらえ、国家社会に対する公徳を教育する方針でやっております。尤も団体的規律節制についての徳性は 主として午後行なう軍事訓練で指導いたしますので それもごらん願うことにしましょう”

そんなに云はれ 午後三時頃まで参観をつづけました。かえりがけに校長室で他の数人の教師をも交え茶菓の御馳走にあづかった際に “お国の学校では修身課目を設け徳性修養をすすめておとのことですが どのようにやっておられるか 参考のためにお教え願いたい” と望まれ、我輩流の英語で説明はしましたものの、はたしてよく了解させ得たろうかと反省しています——

修身の話からはじまり その夜は九時近くまでスキヤキをつつきながら 話し合いをつづけた。ほんとうに何の遠慮も感じせしめない、うちとけた態度、まるで青年のように “君、ロンドンの肉も神戸牛のようにうまいね” などと幾人分かをたいらげた健啖ぶりは まことに気持ちよく見られた<sup>12)</sup>。

12) 鎌倉「初代校長 渡辺龍聖」(『緑丘』70)、今村均からの鎌倉の引用より。

ちなみに渡辺龍聖の弟・加藤知正は、衆議院議員であった。